

## 「私の戦争体験」その2

講師：伊原 昭氏

日時：平成30年（2018）1月20日（土）10：00～12：00

場所：江井島小学校コミセン 会議室

平成29年（2017）8月26日（土）に実施した「私の戦争体験」の2回目を行った。

前回でも話しましたが、予科練は個人の個性を無視して国の方針にはめてしまう、人を型にはめてしまう所で、百人に対して「死ぬ」と言えば全員が死ぬような教育をするところが予科練であったわけです。ほかの軍隊、軍人でもそうだったのかもしれませんが。

予科練は昔は3年かかって養成されたのですが、戦争が激しくなり14か月をもって一人前に要請するほど風雲急を告げていました。戦争はもうゆるがせが出来ないときに入っていたということです。

台湾のゼロ戦部隊で訓練を受けましたが、本土の予科練の訓練などは幼稚園でここはともでないが大変厳しい訓練でした。走る訓練では教官はムチならぬ竹竿を持って自転車で追っかけて後ろからつつくわけです。みんな必死でした。

バットでお尻を叩き、お尻が紫色に内出血をしており、寝るときには痛さが厳しく、仰向けで寝なければ寝れません。

訓練で失敗すると全員責任、総員責任と言ってまた叩くのです。敵が来た時に飛行機に走って行ってすぐに飛び立つようにしなければなりません。失敗は即「死」ということです。これは徹底的に仕込まれました。はじめは地獄のように恐ろしいところです。

今日は別の角度からします。

前回の話の話をした後で感想を書いていたいただきましたものを読みました。感想を読みまして私は嬉しく感じました。

とりわけ、その中のお1人が「なぜあの戦争は起こったのか、国民はなぜそれが止めることはできなかったのか」ということを聞いたかったとの記載でした。そのところが戦争体験を語る一番のポイントなのです。あれだけ多くの犠牲を払い、日本国中があれだけ苦しい目に遭いました。あの戦争がこれからどうしたら防げるかということに通じる訳です。

今日はその所をお話をします。

私は歴史家でも政治家でもありませんので正確なことはお答えできませんが、素人として私なりに感じていたことを思っていることを話します。

明治以来の日本は一步間違えれば欧米諸国の植民地にされるにされる危機感を持ってい

ました。だから富国強兵という国を富ませて強い兵隊を作らねばならないという風潮でした。中国がアヘン戦争でさんざんな目に遭わされて香港、上海、その他の至る所で租借地を、外国の借り上げ土地で諸外国から痛めつけられ、例えばシンガポール、インド、東南アジア諸国と中国のみならず、そういう国までが植民地になってしまっていました。

フランス、イギリス、スペインそういう欧州勢がアジアの国々を植民地にしてしまっているわけです。日本もやられるかもしれないという心配をするのは当然です。調べてみますとイギリスは本土の100倍の面積の植民地を、フランスは20倍の植民地を、例えばアジアに仏領インドシナと言う植民地を持っていました。東南アジアのあたりはそういった国が多く、日本が富国強兵で少し自信がついてきて、遅まきながら朝鮮を植民地にしまして、アメリカはハワイとフィリピンを植民地にしました。

日本は後塵を拝して満州に国家を作り、さらに軍部が満州から中国に入り、盧溝橋という鉄橋を爆破して中国人がやったように見せかけて、軍隊の過激派というのでしょうか、陸軍が攻め込んでいって日中戦争が始まりました。子供の頃でしたが日本軍が中国の内部の南京陥落をしまして、国内ではちょうちん行列をして喜んでいました。

日本がどこまで侵略するかわからないので、蒋介石がついにアメリカとイギリスに助けを求めました。両国は日本を威嚇したのですが、軍隊の勢いは留まることを知らず、ベトナムからインドシナ方面の南方の方まで侵略をしました。

その後アメリカと戦争をすることになったのは今の北朝鮮と同じで諸外国から日本に石油やゴムを売るなという経済封鎖、締め付けを受けました。

外交交渉をすることに苦手な日本が、走り出したら止まらない日本人の悪い癖があるようで、とうとう真珠湾攻撃を行ってしまうのです。

国民はなぜ暴走を止められなかったかというと2.26事件で総理大臣や大蔵大臣が殺され、軍部が力を持ち出してきて軍隊の意に沿わない政治家を黙らせる状況を作ったのです。このように乱暴なことが起きました。

その当時は共産がかった人はすぐに警察や政府から睨まれて牢屋に入れられて、まるでけものを狩るような調子でした。共産党という党があったのですが、我々には全く存在が分かりませんでした。「共産党は怖いぞ」ということを聞かされていました。

今から考えますとあの人たちは大事な人だったのではないかと思います。「共産党という思想は断じて許せん、非国民だ」というという時代ですのでこの頃は私も悪人だと思っていました。

こんな時代ですから国民が戦争を止められることはできません。子供が将来は兵隊さんになるぞという子供ばかりでした。

なぜ兵隊さんになりたいかという兵隊さんは勇ましい、日清戦争や日露戦争で負け知

らずで、戦えば必ず日本は勝ちました。何しろ良い話ばかりを聞いて育ったわけで、日本の軍隊の悪い話は爪の垢もないのです。

子供時分から特に中学当時では道徳教育は教育勅語というのが教育の基本でした。親に孝行し、君に忠義し、一旦緩急あれば身命を賭して君のために働きこのようなものが教育勅語です。

教育勅語を分かりやすく説明します。

例えば「国憲（こっけん）を重んじ国法に従い一旦緩急あれば義勇（ぎゆう）公（こう）に報じ以て天壤無窮（てんじょうむきゆう）の皇運（こううん）を扶翼（ふよく）すべし」こういう言葉が並んでおり、続いて「かくの如きは、独り朕（ちん）が忠良（ちゅうりょう）の臣民（しんみん）たるのみならず又以て爾（なんじ）祖先の遺風を顕彰するに足らん」とこういった言葉が続いています。

易しく解説しますと「朕」というのは天皇陛下が「自分が」という意味です。「朕が思うにわがご祖先の方々が国をお始めになったことは極めて広遠であり、徳をお立てになったことはきわめて深く、厚くあらせられる。またわが臣民はよく忠義に励み、よく幸を尽くし、国中のすべての者は皆心を一にして」とわかりやすく解釈してみますとまあこういう風な意味になります。

そして続いて「なんじ国民は父母に孝行を尽くし兄弟姉妹仲良くし、夫婦互いに睦みあい、朋友互いに信義を以って交わり、へりくだった気随気儘（きずいきまま）な振舞いをせず、人々に対して慈愛を及ぼすようにし、学問を修め業務を習って知識才能を養い、善良有為の人物となり、進んで公共の利益を広め世のためになる仕事をおこし、常に皇室典範並びに憲法を始め諸々の法令を尊重遵守すべし、万一危急の大事が起ったならば、大義に基づいて勇気をふるい身を捧げて皇室国家の為につくせ」。このようなものが教育の基本になっていたわけです。これらのことで育ってきた人間が兵隊さんがまさかあのような暴力的なことをやるとは想像できないのです。

政治家を殺して軍隊の言うことを聞かせる情報しかないわけです。国民が止められるわけがないのです。

ここに持ってきました本は朝日新聞社が戦後発行した本で、政府系でない普通の新聞記者が戦場に行って大事な貴重な写真をすべてを軍が「許可」「不許可」のハンコを押して検閲したもので軍にとって都合の悪いのは発行させないのです。戦地の状況をみんな検閲しているのです、国民はつんばに置かれていました。「右行け右」と言えばみんな右に行ってしまうという今では考えられない状況でした。

こういった情報隠しは今もあります。自衛隊が国連平和維持活動でアフリカの方に派遣されていたことがありました。これはあくまでも破壊された道路や橋を作るために派遣されたものですが、戦争をするためには派遣はされておりません。憲法に自衛隊がそれまです

ることは許されておりません。しかし実際は弾も飛んでくるのです。そのような状況を日本に報告する毎日の「日報」があるはずなのに「ありません」とか「紛失しました」とか言って、最高責任者は稲田という女性の防衛大臣でした。その人が隠した、自分は知っていて情報を隠したことが問題になりました。更にその方が日本は「日本は核兵器を作っても良いのではないか」というようなことを言ってクビになってしまいました。

またこの度の森友問題でも 8 億円も国の土地を安くしたと言ったり、加計学園でも書類はありません、破棄したなどと言って国民をだますようなことをするのは昔の戦前の時のようなことを感じます。

戦争を起こさないために何を国民は気をつけねばならないかを考えていかねばなりません。「憲法」は権力者が守らなければならないことを定めてあります。国民が守るためではないのです。権力者が守るために国民が作ったものです。そういったことから憲法 9 条はなぜ変えようとしているのか明後日から国会が始まりますが、安倍総理は今まではなぜかはきはきしなかった憲法問題に本腰を入れて審議をするのだそうです。今国民も憲法問題の是非の判断をしなければならない時期にきておると思うのです。

憲法の 9 条はどういうことが書いてあるかと言えば 1 項には「日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する」。

2 項は「前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない」。

これを訳して分かり易く言葉にすると「1 項は私たちは筋と話し合いで成り立っている国同士の平和な状態こそ大事だと思う。だから国として武器をもって相手を脅かしたり直接殴ったり殺したりはしない。もし外国とトラブルが起こったとしてもそれを暴力で解決することは永久にしない。戦争放棄だ。2 項は 1 項で決めた戦争放棄といった目的のために軍隊や戦力を持たないし、交戦権も認めない。」これが憲法 9 条です。これは 2 項の「陸海軍、その他の戦力を保持しない」と書いてあるのに自衛隊を持っているというのは「自衛隊が可哀そうではないか」とことでここを改正したいという。

「国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する」ということは置いて「陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない」というここを変えたいというのが今の安倍総理のやり方なんです。自衛隊が可哀そうではないか、だったらどうするといいいのか。自衛隊のことを自衛軍にしたいとか国防軍とかほかの名前があるようですが今の自衛隊の名前がいいのかそこらへんがはきはきしません。

憲法のことと少し違いますが、「集団的自衛権」を国会の審議もあまりせずに閣議決定で解釈変更をしてしてしまいました。自衛隊は自分の国を守るためのものなので、自分の所から域外に出て戦争に参加するということは今の憲法では許されないのです。しかし、この集

国的自衛権はどこまでもアメリカについて行くことに変えようとしている、このことは私と意見が違うわけです。

アメリカという国は覇権を世界広げたいという国で、いろんな国に手を突っ込んで、アメリカが出てくるとベトナム戦争がおきたり、東南アジア方面で紛争が起きたりで、ことがだんだん大きくなり、そのような国について行く、同盟を結んでいるのだからついて行くしかしょうがないのです。自衛隊はアメリカ軍の指揮下に入ってしまうというようなことになります。このようなことはやめてほしいと思います。これを止めるのは国民が「それは賛成しない」ということを言わなければなりません。このまま国民が黙っていたらどこまで行ってしまうか分かりません。

いま政治の世界の危険性は「戦前に帰る」と私は認識しています。また「秘密保護法」と言う法律を盾にして情報を国民に知らせないというようなことが起きていくと具合の悪いことになりますから、国民が政府の動きに目を張っていかなければならないのです。

昔の軍部の横暴というのに似てくるわけです。少数意見に耳を貸さない、だんだん少数意見が押さえられ、それが昂じて権力を持っている、例えばドイツのヒトラー体制のように誰も反対するものはなくなった。皆秘密保護法で捕まえられるという法律なんでしょう。

(伊原講師が持参した朝日新聞社の戦争中に検閲を受けて発行された政府に都合の悪い黒塗になった削除の文章の入った復刻本を持参した本を回覧しながら) みんな検閲を受け政府はこのようにマスコミに対して口出しをする、テレビなどに口出しをするようになってくると昔のあの時代に帰ってくるわけで、些細なことでも国民はこれを監視しなければと感じています。

なにしろ、みんなが選んだ総理大臣を批判していると、こちらも手が後ろに回りそうですが、今度の教育勅語が好きだったり、森友学園の人が好きだったり、右寄りの人だと思います。だから靖国神社へ意気込んで参られました。

勇ましいところが好きな国民がたくさんいまして「靖国に参るのは何が悪いのか、国のために命を捧げた人に対してお参りをする」ということから安倍さんは立派だ、という人もいます。私は戦友がたくさん祀られています、あそこに戦争犯罪人である戦争を指導した人たちと分けて祀ったらよいと思うのですが、それが難しいようです。今のままに靖国神社に参りますと中国や韓国は「日本は恐ろしい国だ、また昔に帰ってきている、先の戦争を反省していない」と言うのです。そういった警戒感を抱くのですね。

今度の憲法改正でも勇ましいのが好きな国民ですのでなんとか憲法改正と言うのは今のままにしておいてほしいと思います。私は切に願っています。

以上で今回の話は終わります。